

旭川市報道依頼

各報道機関 様

発表日	令和2年1月8日
発信課	科学館
担当者	川辺
連絡先	電 話 0166-31-3186
	F A X 0166-31-3310
	E-mail kagakukan@city.asahikawa.lg.jp

分 類	<input checked="" type="checkbox"/> イベント・行事    募集    契約・入札    会議・説明会    その他 (該当する分類を囲むこと。)
日 程	1月11日
発表項目 (行事名)	岡田 弘 名誉館長の「サイエンス・セミナー」 開催のお知らせ
概 要 (趣旨・日時・ 場所・内容等を 記入すること。)	<p>日時 令和2年1月11日 午後1時30分から午後3時</p> <p>会場 旭川市科学館 1階 サイエンスシアター</p> <p>講師 岡田 弘 旭川市科学館名誉館長(北海道大学名誉教授)</p> <p>内容 「人物史でたどる地震・火山防災150年間のあゆみ」 2000年の有珠山噴火の際に、基礎研究の成果を活かした事前対策によって死傷者をゼロに抑えたことで知られる講師による講演会。 研究者や行政関係者など、様々な分野で地震・火山防災に関わった方々の人物像と、これからの防災・減災についてお話いただきます。</p> <p>定員 先着50人(当日、会場に直接お越しください)</p> <p>参加費 無料</p> <p>その他 同日、館内で開催されている「ジオ・フェスティバル in Asahikawa」も合わせてお楽しみください。</p>
添付資料	<input checked="" type="checkbox"/> (講師略歴, 講演要旨)    ・    無 (有・無のいずれかを囲むこと。) ※ 有の場合、資料の内容を記入すること。なお、別途冊子等の配付を希望する場合は、その旨記入すること。
報道(取材)に当たってのお願い	
備 考	

## 略歴

### 岡田 弘 (おかだ ひろむ)

学 位： 理学博士(北大 1977 年)  
出 身： 長野県長野市 生年月日： 1943 年 12 月 27 日  
最終学歴： 北海道大学大学院理学研究科  
修士課程修了(地球物理学専攻)  
現 在： 北海道大学名誉教授(火山学、地震学、減災情報学)  
NPO環境防災総合政策研究機構北海道(CeMI)理事  
壮瞥町防災学識アドバイザー(壮瞥町情報館あい)  
洞爺湖有珠山ユネスコ世界ジオパーク科学顧問  
旭川市科学館サイパル名誉館長



連絡先 : 〒060-0001 札幌市中央区北1西8,2-39みたけ大通ビル8F NPO-CeMI phone: 011-271-2663  
札幌市北区在住 e-mail:hokada@npo-cemi.com fax: 011-204-7367

北海道大学で地震学を宇津徳治先生に学ぶ。プレートテクトニクス説確立の時代に、沈み込むプレートを実証した地震波発見が博士論文。1968年北大助手(地震学担当)、1977年有珠山噴火応援を機に火山学へ転進。家族とともに有珠山麓の有珠火山観測所で21年間過ごし、北海道や内外の火山噴火の予知と減災基礎研究に専念。この間、有珠山や十勝岳噴火などの火山危機の修羅場で学ぶ。基礎研究の成果は2000年有珠山噴火での死傷者なしの事前対策などに実った。有珠火山観測所長、地震火山センター長など歴任。また、気象庁火山噴火予知連絡会北海道地区幹事、道庁防災会議火山専門委員などの社会支援に長年従事。

現在、各地の減災助言やジオパーク科学顧問など。火山学(噴火予知)・地震学・減災基礎科学(危機対応・減災コミュニケーション)が専門。「地球をよく知り、地球と仲良く」「まだまだ可能な減災をめざせ」が信念。

#### 職歴

1968年4月 北海道大学理学部助手(地球物理学科地震学火山学講座、1979年同講師)  
1981年7月 北海道大学理学部助教授(附属有珠火山観測所(壮瞥町勤務、同所長 87.4~98.4))  
1998年8月 北海道大学大学院理学研究科教授(2002.4~2004.4 地震火山センター長、2007.3 退職)  
2007年4月 北海道大学名誉教授

#### 主な海外学術研究 (留学・調査・国際学会など、延べ23カ国、39回、1204日)

1972.1~1974.1 米国カーネギー研究所(DTM-CIW) 1985.4~6 米国カスケード火山観測所(USGS-CVO)  
1989.7~8 ポルトガル火山危機支援国際調査団 1993.2~3 フィリピンマヨン火山火砕流災害調査  
2006.11-12 エクアドル JICA 火山防災支援 2016.11 JICA 中米三カ国訪問 2018. ナポリ会議 COV

#### 受賞など

2000.11 北海道新聞文化賞特別賞 2001.03 北海道科学技術賞 2001.09 防災功労者内閣総理大臣表彰  
2010.10 地方出版文化奨励賞 2018.10 JCA 理事長表彰

#### 主な著書

門村浩・岡田弘・新谷融、1988 「有珠山--その変動と災害」 北海道大学図書刊行会、248p、岡田弘・宇井忠英、1997 噴火予知と防災・減災 「火山噴火と災害」、東大出版、79-116、北海道新聞社(共著)、2002 「2000年有珠山噴火」 287p、勝井義雄・岡田弘・中川光弘、2007 「北海道の活火山」 北海道新聞社、183p、岡田弘、2008 有珠山 火の山とともに 北海道新聞社 326p(2010年地方出版文化奨励賞授賞作)、岡田弘、三松三朗(編)、2016 「ジオパーク早わかり資料 生きている大地で生きる」。壮瞥町、113p、岡田弘(共著)2016 「宮沢賢治 科学と祈りのこころ」。北海道立文学館、167p。

# 有珠山研究の足跡紹介

## 岡田名誉教授「1冊だけの本」

火山学者として2000年の有珠山噴火で住民の事前避難を助言した北海道大名義教授、岡田弘さん(75)が、過去の有珠山噴火の調査・研究に携わった学者や地元関係者の関わった経緯や当時の行動などを1冊ずつまとめた資料集。岡田さんが関係者の足跡を紹介する「1冊だけの本」1冊の研究資料などを整理する中で、1冊ずつ取り組んでいく。最新刊は今年8月に出版された元壮瞥町長の山中謙さん。当時共に災害対応に当たった盟友で、「火山の見識」とともに、行政をよ

く熟知した頼りまねな人だったと懐かしむ。「1冊だけの本」は、

これまでに「日本地

理学の父」として知ら

れ、1910年の有珠

## 最新刊は山中 元 壮瞥町長



山中謙さんの写真なども多く取り入れて作製した岡田・北大名義教授の「1冊だけの本」1冊の壮瞥町の火山防災学び館で

山噴火で自ら試作した地盤計で観測した東京大の大森勇吉教授のほか、同噴火で事前に住民への避難命令を出した室蘭警察署の飯田誠一署長、77年噴火の調査研究や88年の十勝岳噴火の防災対応にも当たった北大の勝井義雄

教授ら30人分ほどがまとめられている。山中さんは地元でレストランなどを経営し、商工会理事などを

ともに、生活への影響が大きい住民避難を早期に解除できないか独自に探っていたという。岡田さんは「00年噴火から来年で20年となり、いつ噴火が起きてもおかしくない。過去の噴火に携わった人たち、何がその時、どう行動し、何をしたのかを知

るきっかけにしてほしい」と話す。【昆野亨】

2020年1月11日 旭川市サイパル講演会  
人物史でたどる地震・火山防災 150年間のあゆみ  
北海道大学名誉教授・NPO環境防災機構理・旭川市サイパル名誉館長 岡田 弘

講演概要

地震や噴火災害と科学的に向き合ってきた人類の歴史は未だ短い。とはいえ、過去150年ばかりの実験はきわめて教訓的であり、日本も世界で重要な役割を担ってきた。概観すれば、続発した大震災（1891年濃尾・1923年関東・1995年阪神・2011年東日本）や甚大な噴火災害（1902年プレー山・1985年ルイス山）の教訓が、その後の地震や噴火現象との向き合い方「官学民メディアによる減災協働」への道しるべとなった。

これらの大災害における「歴史の教訓」を今後に生かすためには、「時間・空間を思い切って広げ、内外の先人たちの実体験を掘り起こし、歴史から学び、歴史を活かす一貫した姿勢が、変動する大地で生きるための基本」となることは明らかである。

ジョン・ミルンに始まり、彼が育てた関谷清景・大森房吉・今村明恒らによる初期のめざましい社会的活躍はよく知られているとはいえ、最近の見直しによりいまだに新発見続出の状態である。北大農学校の地学講師だった大井上義近や田中館秀三が、有珠山明治噴火や十勝岳大正噴火などで、地域支援に徹した火山のホームドクターとしての足跡を歴史に残したことも新たに確認できた。

この講演では、作成中の4000ページ超に及ぶデータファイル「火山と向き合った人々」を参考に、地震・火山防災の150年史のエッセンスを紹介する。調査対象としては、多くの研究者が中心となるが、直接対応に当たられた地元の行政官・首長・民間人、メディア、作家などを含める新たな手法を用いた。行政官としては飯田誠一室蘭警察署長、首長としては岡村正吉虻田町長・山中漢壮警町長、民間人としては三松正夫壮警郵便局長、メディアとしては小池省二朝日新聞編集委員・伊藤和明NHK解説委員、作家としては宮沢賢治・新田次郎などが含まれている（肩書はいずれも当時）。

最近、ジョン・ミルン、トーマス・ジェイガー（ハワイ火山観測所長）、大森房吉などの詳細な伝記や再評価本に加えて、セントヘレンズ山やルイス山、雲仙岳などの主イベントに関する出版が続出している。中でも太田一也九州大学名誉教授による自らの雲仙岳噴火の社会対応を克明に綴ったたぐいまれな力作（太田2019、長崎文献社434p）が30余年を経て世に出たのは、意義深く画期的である。次の災害で悔やまないためには歴史から学び歴史を活かす以外に道はない。

参考：

- 岡田弘、2008「有珠山 火の山とともに」北海道新聞社、326p.
- 岡田弘、2015 モニタリングと警戒避難の隙間 災害情報、NO. 13、8-15.
- 岡田弘、2016 宮沢賢治はブドリに何を託したか（宮沢賢治科学と祈りのこころ167p、道文学館）、75-85.
- 岡田弘、2019 防災文化の創造を目指して。「プラクティス・特集胆振東部地震から1年」、No. 30、27-29.

（2000年有珠山噴火から20年目を迎えるにあたって 2019年11月15日 岡田弘・筆）